

## C F T ニュース & 息抜き（9月）

全日本コーヒー公正取引協議会（コーヒー公取協）に寄せられた問い合わせなどを、トピック形式で毎月リリースします。参考になれば幸いです。

### 1. 2025年8月の気になる問合せ

#### （1） ブラジルのコーヒー豆の最高等級について聞きたい。

ブラジルのコーヒー豆輸出規格の格付けにおいて欠点数とスクリーンサイズは連動していないため、生豆 300g 中の含有量欠点数 4 とスクリーンサイズ 16up で No. 2 と格付け。

ブラジル No. 2 であることに変わりないためブラジルの最高等級と謳えるか否か。

⇒ ブラジルの No2 やコロンビアのスプレモの輸出規格は豊凶により時々変わると聞いています。規格が変更されてもこれらの国の最上位輸出規格であることは変わらないでしょう。

このようなことからコーヒー公取協では「最高級」という名称にできるかどうかは判断しかねますが、サントス No2 やスプレモを使用したものについては「プレミアム」、「高級」、「最上位等級豆」などの高品質コーヒーをイメージさせる表現はこれまで認めています。

問題は景品表示法の優良誤認表示とされないために、当該コーヒー豆の格付け証拠書類を保存しておき、行政庁より措置命令等により根拠を求められた時には提出できるようにしておいてください。

#### （2） コーヒー貿易を行っている〇〇だ。当社で扱っているデカフェのマウンテンプロセスウォーターの製品が入ってこなくなったので、デカフェ率がほぼ同じのスイスウォーターのデカフェにしたいと考えているが、古い包材があるのでこれにスイスウォーターの製品を入れて販売したい。注意すべきことはあるか。

⇒ 容器包装に「マウンテンプロセスウォーターのデカフェコーヒー」と記載しているのであれば、カフェイン除去率99%の製品であっても、スイスウォーターの製品であることをシール貼付などにより告知しなければならない。そのまま包材を使用して販売されると虚偽表示とされかねない。

デカフェメーカー名を記載せず、カフェイン除去率のみ記載している包材であれば、メーカーが異なっても使用されるのは問題ない。

御社は輸出企業の資料でカフェイン除去率同じと判断されているようであるが、時々自社でカフェイン含有量を測定したところ違っていたとの話を聞くので、妊婦などが飲用することもあるデカフェコーヒーは十分注意されたい。

(3) この度、全日本コーヒー公正取引協議会の会員になった。従業員より名刺にコーヒー公正マークを入れたい、との希望があるがよいか。

⇒ 会員社なので名刺にコーヒー公正マークを入れることは問題ありません。

## 2. コーヒーを巡るいろんな状況

全日本コーヒー公正取引協議会は、9月24日から27日まで開催される日本スペシャルティコーヒー協会(SCAJ)の展示会に小間を出展する。これはSCAJのご厚意によるもので感謝に堪えない。24日にはコーヒー公正競争規約などの説明もさせていただくことになっている。

ところで、ニューヨークコーヒー相場が高原相場にある中で、米国大統領はブラジルに50%の関税を課すこととした。米国国民の大事な飲料であるコーヒーの価格は間違いなく上がるだろう。大富豪の不動産事業者には痛くもないことであろうが、インフレ基調にある中で生活用品が上昇するのは庶民にはつらいことである。コーヒー輸出国であるインドにも50%の関税を課すことにした。BRICs諸国には共通の敵のように見えるだろう。

いずれにしても、コーヒーの国際取引は複雑化する。伯国は大豆などと同様に中国やロシアへのコーヒー輸出ドライブをかけるだろう。ベトナムはロシアや中国へ輸出しているから影響が大ではないか。

歴史的に米国は関税政策をとってきており、共和党の第25代大統領のマッキンリーはディングレー関税法で57%の関税を課した。また、この大統領はハ

ワイの米国への併合やフィリピンの米国植民地化など、カナダを米国の州にと  
か、グリーンランドを欲しいとか言った誰かと似ている。不幸な最後には同情す  
るが。

第二次世界大戦の要因の一つと言われるのが共和党の第29代ハーディング  
大統領である。高関税政策を取り世界恐慌の要因を作ったともいわれる。現職時  
に病に倒れ亡くなった。前任のウィルソン民主党大統領を批判し国際連盟加盟  
を拒否するなど、これも誰かに似ている。

昔、岩波新書で「フレームアップ：アメリカをゆるがした四大事件」を読んだ  
が、今の USA はでっち上げ天国のような国に思える。世界に範を垂れる国家か  
ら反面教師国家に変貌している。

21世紀の今日、大国といえど経済、政治、地勢的位置を考えて政策を考えな  
いと墓穴を掘ることになりかねない。米国が高関税などの制裁的措置を課して  
いる国の人口、面積、GDP は米国のそれを上回るのではないだろうか。

CFT 子の初めての海外出張は、米国テキサス州カレッジステーションにあるテ  
キサス A&M 大学であった。広大なキャンパスには野球場、フットボール場、ゴ  
ルフ場などの施設があり、これら全てが寄付によるものと聞いて驚いた。出張目  
的の胡麻の栽培農場を見たが、日本の試験農場とは比較にならない広大な農場  
で彼我の国力・研究力の相違を思い知らされた。また、学長以下多数の先生方が  
歓迎してくれ、これにも驚いた。8月のテキサスは暑いのでカジュアルな服装で、  
との言葉に甘えたが、彼らは全て背広にネクタイであった。

ただ、大学構内では黒人を見ることはなく、全て白人のように思えたが、45  
年前のテキサスには人種差別がかなりあったようである。とはいえ、表面的かも  
しれないが米国民とその文化や生活様式は素晴らしいと思えた。その後、何度も  
米国へ行ったが、もう行くことはないだろう。

米国のコーヒーは CFT 子には1980年代から90年代はまずかったが、美  
味しいコーヒーをとというスペシャルティコーヒー活動の成果か2000年代に  
なると見違えるように美味しくなった。      コーヒーは平和の飲物である。

(2025年9月4日記)